

「さあ行って、告げなさい」

(マルコ16:1～8)

挽地茂男

2019.4.21 日本基督教団千歳丘教会礼拝



教会暦（教会の暦）では、復活日（イースター）のあとペンテコステ（聖霊降臨日）に至るまでの約7週間を復活節として過ごします。わたしたちは、復活節を意味深く過ごすために、もう一度、復活それ自体に目を向けてみたいと思います。教会の伝統的な習慣では、主イエスが十字架に架けられたその週を聖週（間）（聖なる週）と呼び、木曜日に洗足（洗足木曜日）の礼拝をささげ、金曜日（受苦日）には十字架への道行きと、主の十字架の苦しみを黙想の内に覚えます。土曜日は深い黙想の内に、過ごされます。伝統的な教会では、徹夜祈禱会がもたれたりします。夜明け前にこそ闇が最も暗く深く感じられるように、わたしたちも自分たちの人生の闇を、ま

た心の闇を通して、わたしたちの悔い改めるべき罪とそれに対する神の裁きの大きさを自覚すると同時に、それらよりもさらに大いなる十字架の赦しの恵みに包まれて、復活（イースター）の夜明けの光を迎えるのです。土曜日はユダヤ教の安息日です。土曜安息は、金曜に夕刻から始まって土曜日の夕刻に明けます。その安息日が明けると、主イエスを十字架にかけたユダヤ人たちを恐れて身を潜めていた主イエスの弟子たちの中にも動きが出てきます。最初に動き始めたのは、数人の女性たちです。

安息日が明けた週の初めの日の早朝に（つまり現代で言えば日曜日の朝に）、数人の女性たちがイエスの亡骸が納められた墓にやっ

てきます。

16:1 安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行



くために香料を買った。16:2 そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。16:3 彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。

彼女たちを墓で待っているのは、愛する主イエスの亡骸です。そのはずです。今の彼女たちにとってはそれ以上は考えることができません。彼女たちは、イエスに対する人間としての最大の愛情をこめ

した。

墓に横たわるキリストを描いた有名な絵があります。その絵の作者はドイツ・ルネサンス期に活躍した画家ハンス・ホルバイン(子) (Hans Holbein the Younger, 1497-1543)。絵の題名は“Der tote Christus im Grabe”「墓の中の死せるキリスト」(1521-22年頃 | 31×200cm | テンペラ・板 | バーゼル美術館所蔵)。ホルバインが手がけた宗教画の中で最も有名な



ハンス・ホルバイン「墓の中の死せるキリスト」

て、その亡骸を丁重に吊うために、考えられる準備と心配をしながら墓にやってきます。遠目に墓が見えてきました。墓の中には主イエスの亡骸が横たわっているはずなのです。唯一問題は墓の入口を塞いでいるあの大きな石だけです。

「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」(3節) 彼女たちは、あの大きな石が何とかなれば、主イエスのご遺体に、香油を塗り、思う存分お別れもできる、と考えを巡らしていたので

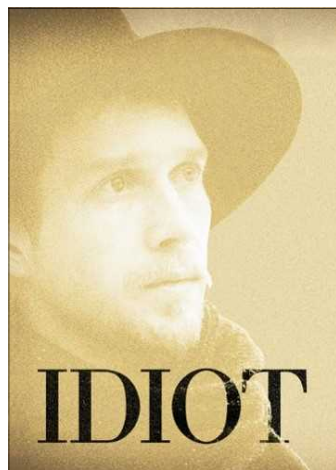
作品のひとつです。その絵に描かれたキリストの死体からは、圧倒的な死のリアリティが放たれています。バーゼルの美術館でその絵の前に立った作家ドストエフスキーは、この絵に心を鷲掴みにされ、打ちのめされてしまいます。そしてその絵の前でまるで金縛りにかかったかのように立ちすくんでしまいます。石のように動けなくなって、体を震わせながら、顔面の色を失っていくドストエフスキーが、持病の癲癇の発作を起こしか

けたと見て、あわてて家族が彼を絵から引き離したというエピソードが残っています。

イエスの死体には、その死を確認する為にローマ兵によって突かれた槍の傷痕が残っています。イエスの体の抹消部分である手や足やそれにその顔さえも、すでに黒く変色して、腐敗が始まっているのが分かります。その顔には、かつて人々に強い印象を与えた尊厳の断片すら留まっておらず、半開きになった眼と口は、まるで精神性を感じさせない蠟で造られた細工物のように生気を失っています。解剖学的な見地から磔刑(十字架刑)に処されて死んだイエスの亡骸はすでに3日を経過した状態だ、と言われます。ホルバインは、イエスの亡骸の前におそれかしこまりつつ、腐敗によってイエスを浸食しつつある肉体的衰退を、極めて恐々〔びくびくと恐れるさま。恐れ慎むさま。おそるおそる〕とした写実をもって克明に描写しています。この後に復活すべき神の子イエスの肉体は、あまりにも絶望的な腐敗と衰退に投げ込まれているのです。

この「墓の中の死せるキリスト」

という絵は、作家のドストエフスキーに多大なインスピレーションを与え、その小説『白痴』の中で重要な役割を演じます。この小説は白痴の主人公ムイシュキン公爵を中心に四人の主人公の人間模様



を軸にして展開するのですが、ドストエフスキーは主人公のムイシュキン公爵ともう一人の主人公のロゴジンという男をこ

の絵の前に立たせて、ロゴジンにこう言わせます。ドストエフスキーの文章はこうなっています。

「おれはあの絵を見るのが好きだね」ちょっと口をつぐんでから、またしても自分の質問を忘れたかのように、ロゴジンはつぶやいた。(それに公爵が答えます)

「あの絵をだって！」公爵は思いがけなく心に浮かんだある考えに圧倒されて、ふいに叫んだ。「いや、人によってはあの絵のために信仰を失うかもしれないのに！」信仰を失うかも知れない絵。そこには死に呑み込まれたキリストが描かれているのです。でも「復活」

がある。しかしながら「復活」という言葉が、子どものざれごとの遊び言葉に響くように思える、そんな死のリアリティが、その絵を占領しています。「復活」という季節的な繰り言が無内容な単なる絵空言、空事に過ぎないかのようには思わせる、圧倒的な死のリアリティがその絵から伝わってくるのです。信仰を失うかも知れない絵。それはその絵を前にしたドストエフスキーの心に去来した感覚でした。キリストが死んでいる。救い主が死に飲みこまれて敗北している。信仰を失うかも知れない。彼はそう感じたのです。

同じ『白痴』の別の箇所では、ドストエフスキーは肺病を病み、自殺を試みて未遂に終わった青年イッポリートをこの絵の前に立たせて、このように告白させます。

「もし死というものがこんなにも恐ろしく、また**自然の法則**がこんなにも強いものならば〔ものを投げれば落ちる自然法則のように、人は人というだけで、当然死ぬ存在である〕、**どうしてそれに打ちかつことができるだろう、という考えがひとりでに浮かんでくるはずである。生きていう中には自**

然に打ちかち、それを屈服させ、『タリタ・クミ』と叫べば（少女は立ちあがり、『ラザロよ出よ』と呼べば死者が歩みだしたというキリストでさえ、ついには打ちかつことのできなかった自然の法則にどうして打ちかつことができようか！ この絵を見ていると、自然というものが何かじつに**巨大な、情け容赦もないもの**の言わぬ獣のように、いや、それよりもっと正確な、ちょっと妙な言い方だが、はるかに正確な言い方をすれば、**最新式の巨大な機械**が目の前にちらついてくるのである。その機械は限りなく偉大で尊い存在を無意味にひつつかみ、こなごなに打ちくだき、何の感情もなくその口中にのみこんでしまったのである。〔中略〕つまり、このいっさいのものが屈服している、暗愚で傲慢で**無意味に永久に続く力の**観念をこの絵は表しているもののようである。」

ドストエフスキーは、思想犯として死刑の宣告を受け、処刑執行までの約40日間、死の恐怖におびえ続けます。そしてその判決



が死刑執行日に皇帝の特赦という
予定されていた「茶番劇」に終わ
るまでの40日間、死の恐怖に往復
ビンタを食らうような毎日を過ご
します。時には発狂しそうな精神
状態に追い込まれ、わなわたと震
えながら涙と一緒に自分も溶けて
消滅してしまうかのように泣き尽
くす夜を何度も過ごします。そん
なドストエフスキーにとっては
「復活」から死を見ることができ
なかったのです。死の重圧があまり
にも重すぎるのです。十字架の
苦難と死は、約束された復活の序
曲でしかないと軽やかに考えるこ
とはできないのです。その死はや
がて「復活」という勝利に飲まれ
る、まるで「できレース」のよう
なものとしてイエス・キリストの
死を見ることができないのです。
ドストエフスキーの「復活」とは、
死がもたらす恐怖と絶望と腐敗を
突き抜けてこそ、初めて見えてく
る希望なのです。あるいは「死」に
象徴される人生の絶望、徹底した
行き詰まりを経過しそれを突き抜
けたところにしか見えてこない希
望なのです。

福音書記者マルコは、福音書記
者の中で最も、人間の死や苦しみ

について行き届いた眼をもってい
ます。マルコの視点は今日の「復
活」の記事にもよく現れています。
4－5節。

16:4 ところが、目を上げて見
ると、石は既にわきへ転がしてあ
った。石は非常に大きかったので
ある。16:5 墓の中に入ると、白い
長い衣を着た若者が右手に座っ
ているのが見えたので、婦人たちは
ひどく驚いた。

マルコの記事では奇跡的な要素が
最大限に抑制されています。墓の
入り口を覆っていた石こそ、婦人
たちが到着する以前にわきに転が
されてはいますが、①天使も登場
しません。天使ではなく「若者」
とされていることに注意が必要で
す。これを他の福音書に合わせて、
天使と解釈する註解者は後を絶ち
ませんが、そのように無理に解釈
してしまうと、マルコのメッセ
ージの大切な部分を取り逃してしま
います。さらにこの箇所には②復
活した主イエス・キリストの姿が
出てきません。復活顕現が欠落し



ているのです。復活の一手手前で終わっている、といった印象があります。〔この欠落が不自然だとして、後代の写本では、復活顕現の記事が付加されています。皆さんの聖書の「結び一」「結び二」がそれです。また研究者たちは奇妙な解説を生み出してきました。〕その若者のメッセージ。6－7節。



16:6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。



い。お納めした場所である。

16:7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」

復活の主にお会いできるのは、エルサレムではなく、ガリラヤだということです。他の三つの福音書

(マタイ、ルカ、ヨハネ)では、主イエスはエルサレムで復活の姿を弟子たちに現します。ガリラヤで主が復活の姿を現すという、いわゆる「ガリラヤ顕現」と呼ばれるこの記事によって、マルコの背後にはガリラヤを拠点とするキリスト教の「ガリラヤ教団」があり、エルサレムを中心とするキリスト教「エルサレム教団」と対立していたと推定する神学者もでてきました〔ex. 田川建三〕。しかしそれは、あまりにも歴史的推測でこの文言を処理しすぎているのです。まずは、もう少し素直にマルコの全体に照らして読まなければなりません。

イエスと弟子たちにとって「ガリラヤ」とは何でしょうか。ガリラヤは弟子たちの信仰が始まった場所でした。またガリラヤは弟子たちが初めて主イエスに出会った場所でした。ガリラヤで再び、彼らがイエス・キリストに出会うとき、主は再び「わたしについてきなさい」と言われるでしょう。そこから再び始まるということです。十字架上に主イエスを見捨てた者であっても、その信仰の原点から再び始まるのです。「わたしにつ

いてきなさい」と言われる主は、そこではもう復活の主なのです。わたしたちは繰り返しわたしたちの信仰のガリラヤに帰るのです。新約聖書で「復活」を表す言葉の一つに〈アナスタシス〉(ἀνάστασις)というギリシア語があります。言葉の元々の意味は「再び立つ／立ち上がる」という意味です。主イエスは再びた立たれたのです。弟子たちは、そしてわたしたちも、主イエスに出会うときに再び立ち上がるのです。

復活のメッセージを聞いた最初の人々（婦人たち）の反応を見ておきましょう。8 節。

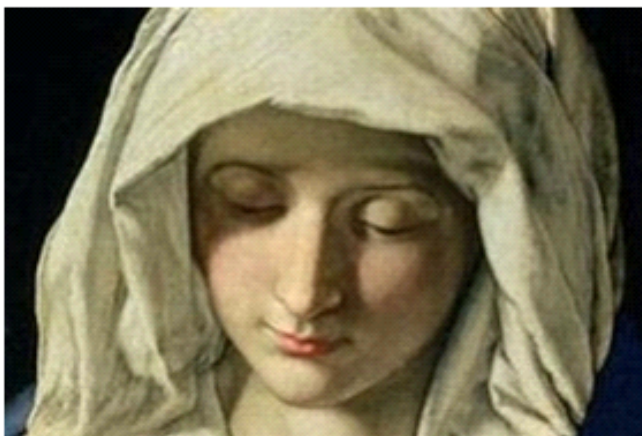
16:8 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

マグダラのマリアを含む婦人たちが、イエスの墓で告げられた復

活のメッセージは、彼女たちの心にすぐに喜びをもたらしたのではないことがわかります。むしろそれは、彼女たちの心の平衡を奪い、彼女たちを沈黙のうちに押し込んだのです。イエスの死と復活を中核とする福音のメッセージは、単に喜びのメッセージではありませんでした。すくなくともマルコ福音書では、単純に歓喜をもたらすメッセージとは考えられてはいないのです。それは喜びのメッセージではあっても、恐れと動揺と沈黙という堅い殻に覆われたメッセージなのです。

やがてこの沈黙が破られることを、わたしたちはすでに知っています。でなければ世界に、そしてわたしたちに福音が届くことはなかったからです。しかし今一度、復活のメッセージが大いなる勝利の喜びとして語り出される前に、それを覆っていたこの沈黙の意味をかみしめてみたいと思います。

『日本書紀』の伝える話の中に、^{ととり}鳥取の伝説という逸話が記されています。^{すいにん}垂仁天皇の皇子として誕生した^{ものいわ}言語ぬホムツワケ皇子が〔失語症か何かの言語的疾患？〕、ある日のこと、大空を飛び去る





大白鳥を見て、はじめて「あれは何か」と叫びます。日夜の悩みから解かれた父親である垂仁は、側近に早速その大白鳥を取らえてくるように命じたといいます。それを捕らえてきた家臣が鳥取氏という氏族に、後の時代には鳥取という県の名前になりました。

沈黙は発見によって破られます。出会いや発見は常にこの逸話に見られるように、何らかの発語を誘います。それは「出会い」のもつ不可抗的な力の結果なのです。発見者は自らならぬ対象によって自らの言葉を引き出されることになります。失語は発語へと連絡します。

わたしたちはわたしたちの信仰の原点に帰る時、いやそこに初めて至るときも、そこに生きておられる主を見出すのです。その時に向かって真実な沈黙は充満しま

す。しかしそれは、やがて破裂するのです。わたしたちは、み言葉なる方を見出すのです。言葉そのものである方を見出すのです。「主は生きておられる。」そしてその時、その出会いに促されるように、自分の口から言葉を発するのです。

もう数年前のことにもなりますが、ある女子大学のキリスト教学関係の授業を担当する講師の懇親会で、どういう話の成り行きかは忘れたのですが、「すぐれた聖書朗読は説教より素晴らしい」というような話になり、講師の一人が彼のアメリカでの経験を話してくださいました。彼は聖書の朗読を大切にしている人たちの集まる〈聖書の朗読会〉に出席していたというのです。ある日の〈聖書の朗読会〉のこと。その日はイースターを前にして、なんとマルコによる福音書全巻が朗読されることになって



いたそうです。1章1節「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」から始まって、イエス・キリストのガリラヤ伝道、数々の奇跡、イエスの譬え、フィリポ・カイサリアでのペトロの信仰告白「あなたはキリストです」、福音書の後半から繰り返される受難の予告と、エルサレムでの宗教指導者との衝突、逮捕、十字架、そしてそれに続く短い復活の記事と唐突な終結。しかし朗読が16章8節でこの福音書の終結部に達して朗読者が、

16:8 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

と最後の節を読み上げた時、朗読を聞いていた参会者の口から異口同音に言葉が発せられたというのです。“Go!” “Go! Mary.” “Go! Mary. Speak to them!”（行くんだ、マリア。彼らに伝えるために）という言葉が…。あまりにでき過ぎた話、という印象を持たれるかも知れませんが、本当の話なのです。

復活のメッセージは、教会によって語られる単なる季節的な繰り

言ではありません。わたしたちもマグダラのマリアを含む婦人たちがとらえられた、動揺と混乱と恐怖と沈黙に深く思いを馳せましょう。しかし私たちの心が主イエスが共におられることを認めるとき、喜びのメッセージは真のメッセージであればこそ、恐れと動揺と沈黙という堅い殻を破ってわたしたちの口に言葉を与え始めるのです。そしてわたしたちの心は、自分にむかって静かに深く、“Go!”と語りかけるのです。喜ばしいイースターのあとに続く復活節を、主イエスの復活の出来事に深く思いを致しながら、1日1日を精一杯に歩んでまいりましょう。

2019.4.21 日本基督教団千歳丘教会礼拝



16:1 安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。

16:2 そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。

16:3 彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。

16:4 ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。

16:5 墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。

16:6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。

16:7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」

16:8 婦人たちは墓を出て逃げ去

った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

16・1 Καὶ διαγενομένου τοῦ σαββάτου Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ καὶ Μαρία ἡ (τοῦ) Ἰακώβου καὶ Σαλώμῃ ἡ γόρασιν ἀρώματα ἵνα ἐλθοῦσαι ἀλείψωσιν αὐτόν.

16・2 καὶ λίαν πρωὶ τῇ μιᾷ τῶν σαββάτων ἔρχονται ἐπὶ τὸ μνημεῖον ἀνατείλαντος τοῦ ἡλίου.

16・3 καὶ ἔλεγον πρὸς ἑαυτάς, Τίς ἀποκυλίσει ἡμῖν τὸν λίθον ἐκ τῆς θύρας τοῦ μνημεῖου;

16・4 καὶ ἀναβλέψασαι θεωροῦσιν ὅτι ἀποκεκύλισται ὁ λίθος· ἡ γὰρ μέγας σφόδρα.

16・5 καὶ εἰσελθοῦσαι εἰς τὸ μνημεῖον εἶδον νεανίσκον καθήμενον ἐν τοῖς δεξιοῖς περιβεβλημένον στολὴν λευκὴν, καὶ ἐξεθαμβήθησαν.

16・6 ὁ δὲ λέγει αὐταῖς, Μὴ ἐκθαμβεῖσθε· Ἰησοῦν ζητεῖτε τὸν Ναζαρηνὸν τὸν ἐσταυρωμένον· ἡγέρθη, οὐκ ἔστιν ὧδε· ἴδε ὁ τόπος ὅπου ἔθηκαν αὐτόν.

16・7 ἀλλὰ ὑπάγετε εἵπατε τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ καὶ τῷ Πέτρῳ ὅτι Προάγει ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν·

ἐκεῖ αὐτὸν ὄψεσθε, καθὼς εἶπεν ὑμῖν.

16·8 καὶ ἐξελθοῦσαι ἔφυγον ἀπὸ τοῦ μνημείου, εἶχεν γὰρ αὐτὰς τρόμος καὶ ἔκστασις· καὶ οὐδενὶ οὐδὲν εἶπαν· ἐφοβοῦντο γάρ.